審査の経緯	
2016 年 4 月 21 日	第 3 回国文学専攻会議 所定の書類の提出が確認・検討される。 ［所定の書類］ 1. 学位審査請求論文の題目と目次案　1 部 2. アピール文　1 部 3. 既発表論文　各 1 部
5 月 12 日	第 4 回国文学専攻会議 博士学位請求論文を執筆できると判断。
5 月 19 日	第 5 回国文学専攻会議 主査と副査を決定する。 主査：栗原　敦 副査：棚田　輝嘉 副査：山内　博之
5 月 31 日	申請者より博士学位請求論文題目が提出される。
6 月 2 日	第 6 回国文学専攻会議 博士学位請求論文の題目届が確認される。
9 月 30 日	申請者より博士学位請求論文予備論文が提出される。
10 月 23 日	博士学位請求論文予備論文公開審査会が行われる。
11 月 10 日	第 18 回国文学専攻会議 予備論文の合格を決定。 以降、博士学位申請論文提出に向けて主査・副査と申請者とが議論を重ねる。
1 月 30 日	申請者より、実践女子大学学位規則第 3 条 1 項に基づき、学位請求論文の論文審査の請求がある。
2 月 11 日	博士学位請求論文公開審査会
2 月 21 日	第 11 回文学研究科委員会 博士学位授与の申請取扱内規第 3 条 1 項に基づく学長からの諮問を受け、当該申請の受理を決定。同内規第 4 条と第 5 条に基づく学長からの付託により、審査委員会の設置を決定。 ［学位論文審査委員会］ 主査：栗原　敦 副査：棚田　輝嘉 副査：山内　博之
2 月 21 日	第 30 回国文学専攻会議 審査委員会より学位請求論文を合格とする案が提出、承認される。
3 月 7 日	第 12 回文学研究科委員会 博士論文審査結果報告及び判定。

論文要旨

宮沢賢治文学における家族像――視座の変化とその意義

宮沢賢治作品を巡る家族の問題は、従来の研究において度々問われてきた話題である。しかし、この問いを解く時の支えとして持ち出されてきたのは、賢治の個人的な事情――、幼年期のエピソードや家の問題、家業や信仰問題による父政次郎との衝突、慈母としての母イチの存在、妹トシの死、恋愛・結婚問題が主であった。

たとえば、「小説的作品をつらぬく基底のモチーフ」に「父と子をめぐる対峙相剋、また渾融の流れ」を見出すもの[1]。「賢治の描く母親像の存在感が、強く生き生きと清らかな輝きを感じさせるのは」「母イチのイメージが常に重なり合ってい」るためである事を指摘するもの[2]等、賢治の実人生上の父子／母子問題と結び付けたものが、多数提出されてきたのである。

恋愛・結婚を巡る問題も、賢治自身が生涯独身であった事に加えて、「けつしてひとりをいのつてはいけない」（「青森挽歌」）という禁止のもと生じた、半ば伝説化されている振る舞いや発言の数々は、多くの注目を集めてきた。

特に、散文作品における女性像や男女関係の問題は、これらを裏付けとして論じられる事が多く、「性器などというもののない、或は必要としないような、聖女型、母性型に近い女性ばかり[3]」や、「焦点が曖昧で失敗作[4]」、「小説形式によって男女関係の問題を問おうとした作者は、荷が重すぎてその点では成功していない[5]」といった、やや否定的な評価を多く得てきた傾向がある。さらには、彼女たちの背後、そして、家族（夫婦）や性の問題を正面から描かなかった理由に、トシの存在を見出す傾向も根強く残っている。

――しかし、それだけで片づけられる問題であろうか、と論者は考えたのである。

もちろん、賢治作品における家族像の背景に、先行研究の指摘がまったく無いわけではない。だが、宮沢賢治という人物の実情は、短くも激しく、常に歩みを止める事なく、濃密な思索と認識の成熟を果たし続けていたものであった。その過程を仔細に辿り直せば、作者自身の家族認識もまた成熟の過程を示している事、そしてその過程が作品表現にも反映されている事に気付かされるのである。

つまり、論者が注目したのは、従来の研究において、作品表現における家族像の成熟過程に対する目配りが欠けていたのではなかろうか――、という事なのである。それゆえ、たとえば性の問題が絡んだ晩年の散文作品を評価する際、血気盛んな頃、あるいはトシの所在を強く求めていた頃の作者の姿を、作品の背後に見出したり求める傾向があったのではなかろうか。

無論、今では晩年の作品として位置づけられている散文作品の中には、賢治作品関連情報が全面開示される『校本宮澤賢治全集』（1973～ 1977）の登場以前まで、初期作品（1919年頃）として受け止められていた時期があるのだから、1950～70 年代の先行研究に関して

は致し方の無い事情がある。

しかし、今を生きる私たちには、『新校本宮澤賢治全集』（1995～2009）の登場を主とする研究の発展により、拓かれた研究環境が与えられている。にも関わらず、1950～70年代の評価を支えに、家族や性の問題を改めて問い直す事なく放置し続けて良いのだろうか。私たちは、常に新しい読みの可能性を探求し続けなければならないのではなかろうか。

以上の事から、本論文では、初期も中期も後期も一括りにして論じられる事の多かった家族像の問題を、その時々の作者宮沢賢治の家族認識と結び付けながら、作品表現における家族像の成熟過程を明らかにする事を試みた。さらには、従来の評価をほとんど発展させる事なく現在に至る散文作品に光をあて直し、新しい読みを示す事を目指した。これが、本論文の目的の一つである。

第一章及び第二章では、「氷と後光（習作）」に光をあてた。従来の研究が、作品の背後に見てきたトシの存在を、作品構想の契機の一つであっても、それ以上でも以下でもない、むしろ、作者が拘り続けていたトシの死を、子どもの巣立ちの際に生じる親子間のジレンマに転化し表現した、その前向きな呼吸の産物にこそ注目するべきだ――、と考えたからである。

その前向きな呼吸によって、「氷と後光（習作）」には、幸せな〈若い家族〉が描かれている。作者が若さを強調したのも、可能性に溢れている事の含意ばかりでなく、家族が必然的に幸せで甘美な空気に包まれる事を想定したゆえと受け止めて、家族物語として読む事を提案した。

なお、第一章では「氷と後光（習作）」の原稿、特に、子どもに対する両親の言葉や子どもの描写に付された×印と斜線に注目をした。創作の時点では疑う事無く清書に至った矛盾（家族の描写と、「若いお父さん」の祈りの言葉が分裂していること等）に、晩年の作者が気付いた為に付したと仮定し、その意味を多角的に問う事によって、家族物語としての再評価を試みた。

第三章で取り上げる「十六日」も、貴重な休日を過ごす夫婦の家を舞台に、夫婦の側に立って描かれている点、そして、夫婦喧嘩や「まだ子供がなく三年経った」と家意識や共同体からの眼差しの問題を彷彿とさせる語りが見られる点等、賢治作品としては稀有な存在である。

加えて、格差という大きなテーマが底流に潜められているのだが、作者の筆は、それを描く事に注力していない。階級差や階層が目に見えない微妙な心理に影を落としているものの、どちらかを強く批判しているわけでもない。むしろ、それらに対する無意味さ、生きてきた環境が異なれば経験や体得したものも異なる事を示しつつ、互いに協力し合いながら慎ましく暮らす若い夫婦に焦点を合わせ、貴重な休日だからこそ起きたであろう夫婦喧嘩を扱っているのである。このような特異性を炙り出す事を試みた。

いずれも、近年注目される事がなく、「氷と後光（習作）」は 1992 年、「十六日」は 1975 年に提出された研究を一つの区切りとして、以後は纏まった論考の提出は見当たらない。この点からも改めて注目する必要があると考えた。

一方、今もなお多く注目を集める、第四章で光をあてた「銀河鉄道の夜」は、作者が亡くなる直前まで手を加えていた作品である。改稿過程から見えるのは、家族に対する作者の拘りである。論者はここに注目をし、ジョバンニの変化と家族の問題を絡めながら考察

をした。

第一次稿から第三次稿まで、ジョバンニが自身の家族とふれあう場面は用意されていない。それが、第四次稿になって「家」の章が加筆されると、ジョバンニの母親は実際の姿をもって作品の現実舞台上に登場し、実体としての母子の会話の場面が用意される。しかも、この会話から浮かび上がるのは、すべて家族に関する事なのである。そこには、厳しい現実の中でも、各々の役目を可能な限り全うし、互いに協力しながら、離れ離れであっても家族で共に前へと進んで行く、という呼吸がある。これもまた、作者の前向きな呼吸による産物である。

序章および終章では、この前向きな呼吸をより立体的に捉えるべく、視座の変化に注目し、個人的体験から普遍性への転成を試みる作者の呼吸から誕生した〈若い家族〉を、各章で触れていない賢治作品と絡めながら、多角的に考察をした。

本論文が注目をしたのは、作品の完成度よりも、このような作者の前向きな呼吸である。晩年の賢治は、「いくらわづかでも文筆で生きられるうちは生きるつもり」（不 13 下書㈡）と、かつての教え子に宛ててこんな言葉を残している。書くこと自体が、生きる意味であった当時の賢治は、同時に、書くことによって、次世代を担う者たちへの希望と期待を積極的に示している事実がある。

頑ななまでに、恋愛や性の問題を書くことを避けていたように見える時期のある賢治が、晩年に積極的に描いたのは〈若い家族〉であった。そこには、従来言われてきたような、後ろ向きな呼吸ばかりではなく、やがてこの世における死を迎える自己は、極力後方へと退き、彼らを見守る存在としてあろうとする呼吸、生命を繋いでいく存在を積極的に描こうとする前向きな呼吸等があったのである。本論文のもう一つの目的は、これらを示すことである。

【注】⑴佐藤泰正「『疑獄元兇』をどう読むか――〈父と子〉のモチーフをめぐって」『作品論宮沢賢治』双文社、1984 年 6 月 ／ ⑵三神敬子「賢治童話に見られる母親像について」『賢治研究』1990 年 8 月 ／ ⑶儀府成一『宮沢賢治　その愛と性』芸術生活社、1972 年 12 月 ／ ⑷続橋達雄「初期に描かれた女性像」『四次元』1956 年 4 月 ／ ⑸続橋達雄「習作期の賢治文学」『四次元』1968 年 1 月

審査要旨

本論文は、宮沢賢治の文学的表現者としての成熟・深化過程を、散文作品を中心として解明・評価しようとしたものである。

対象範囲は、比較的初期の「童話」作品を概観して、個別的論究には早い時期に成立したと見られる「氷と後光（習作）」、後期に近い頃整理されたと考えられる小説的作品「十六日」、晩年近くまで推敲され続けた「少年小説」（長篇）の「銀河鉄道の夜」を対象とする（終章では結びの都合から幾つかの注目作品に触れることになっている）。

方法としては次の二点が指摘できる。ひとつは、表題「宮沢賢治文学における家族像」に見られるように、賢治作品に扱われた「家族」に注目し、それを論究の焦点として、何が見えてくるか、作品に現れる「家族像」の特質や果たしている役割を分析、抽出し、そ

の変貌や意義を考察する。二つ目は、「家族像」を描く作者の眼差し、表現の視点のあり方などを手がかりに、作者自身の家族認識の変化・深化と、結果としての作品表現行為がどう関わり合っていたのかを考究する、ということである。

その際、宮沢賢治に特有なこととして語られる、作品草稿の繰り返される手入れを、個別作品に即して詳細に検証し、それらを生涯の歩みと、人生観や世界認識の変化とも関わらせつつ検証するよう努める、という至極真っ当な手法がとられている。

もちろん、本論文の優れた特質は、作品論としては先行する幾つかの言及はあるが、正面切って論究されることの少なかった「氷と後光（習作）」という作品を深く掘り下げようとしたこと、また、一部では注目されながら、これまた深く論究されることの少なかった「短篇梗概」群の作品「十六日」を総合的な分析の俎上に載せたこと、さらにこれらを代表作のひとつとして論じられることの多い「銀河鉄道の夜」の中心課題の論究に関連づけて、研究の新視点へと生かしたことにあるといえよう。

全体は、「序章　本論文の目的と研究方法」と「終章　結論および今後の課題」にはさまれた、四章立てである。第一章・第二章で「氷と後光（習作）」を取り上げ、第三章で「十六日」、第四章で「銀河鉄道の夜」を取り上げる。

第一章では、「氷と後光（習作）」の草稿において、一旦成立した作品形態にその後加えられた「×印」と「斜線」に注目し、これらが意味するところが何であるか、創作者・表現者としての表現過程のどのような位置に意味付けられるかを、考えられる種々の可能性に及んで粘り強く考察し、「家族」の像が描かれた部分への修訂の意思が認められること、それを、作者宮沢賢治の晩年に向けての表現行為の深化過程に連関付けられる表徴として重視する。この際、先行研究での本作に対する評価を作家の伝記的事項と関連づける議論の幾つかを批判し、修正を求めている（妥当な見解と認められる）。

一方で、童話作家と見なされる宮沢賢治の作品には、当然ながら様々に家族像が見受けられるが、都会風の若い夫婦とその幼い子どもを描いた数少ない事例である「氷と後光（習作）」の特異性を捉えて議論を拡げたのが「第二章　子どものいる家族――「氷と後光（習作）」――」である。ここでは、未婚のまま子どもに恵まれることもなく生涯を終えた作者宮沢賢治が、大正末年以降に妹たち家族に生まれた子どもたち（甥・姪）の伯父となったことに注目して、そのことが作者の家族観、作品の家族像に与えた意義を指摘する。従来、これらのことに焦点を当てた議論はなかったように思われ、新視角であったと認められる。

狭義の「童話」ジャンルというより、大人向けの短篇小説と認めるべき作品「十六日」に焦点を合わせたのが「第三章　子どものいない家族――「十六日」――」である。大人の男女の性愛や、感情とは無縁であったかのように見なす俗説を越えて、結婚後まだ年数の浅い若い山村の鉱山勤めの夫婦の一日を、昭和期の心理主義小説にも相当する筆致で描く作品だが、作品の枠組みに都会の大学生という来訪者が波立たせる階層差、意識の深部に沸き立たせられる対抗心や嫉妬、それが小さな波立ちとして収められるエピソードとして切り取られたものだが、並ならぬ作家的力量として評価しても良いかも知れない本作の再評価の可能性に気付いたところが手柄でもある。作品舞台の鉱山や小道具として印象深い煙草などへの丁寧な調査と言及が添えられている。

第四章は「改稿によって変化した家族――「銀河鉄道の夜」――」だが、第三次稿まで

と第四次高との間にある、推敲過程における作品の変化を、三章までの考察を踏まえて、「家族」への眼差しの深化において捉え直そうとした章である。改稿・推敲過程の意味付けとしては従来指摘されてきた事柄に重なるものではあるが、論者自身の三章までの論旨によって貫かれた「家族」の意味付けの新しさが含まれて、果たされなかった「氷と後光（習作）」の修訂の意思が、「銀河鉄道の夜」の推敲・改稿の中に流し込まれて、形を変えて実現したとでもいうべき展開になった。作家生涯の表現行為の歩みに重ねられて、可能な論議を整え得ていると認められる。

終章は、全体の要約と「今後の課題」だが、第四章での構想を、さらに補強することが期待できる、晩年までの作者の諸作品とそれへの意味付けの素描であり、短篇「泉ある家」や詩篇「〔わたくしどもは〕」にはまだ検討の余地があるが、今後の成果を期待したい。

以上、総合して、博士論文として合格と認めるものである。

以上